

# ARTIST 2023 FELLOWSHIP activity report

2023年度 ACY アーティスト・フェローシップ助成 活動報告書



加藤立  
「“Abstract Face” (on going)」(2023年9月、Co-coya)  
会場風景



坂本夏海  
『Dismantling Motherhood』  
レクチャーパフォーマンス(2024年2月、MPPT)



アーツコミッション・ヨコハマ

## INDEX

### 2023年度の活動について

- 04 2023年度概要
- 05 申請内訳  
審査員からのコメント

### アーティスト・フェロー

- 10 加藤 立
- 16 坂本 夏海
- 22 私道 かび
- 28 山岡 瑞子
- 34 ユニ・ホン・シャープ

### 2023年度総括

- 40 2023年度総括
- 41 アーティストと市民の協働からみえたこと
- 42 公募概要

## ABOUT ACY

アーツコミッション・ヨコハマ(ACY)は、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団が運営する、芸術やデザインにおける社会連携、地域連携を進めるプログラムです。芸術やデザインを軸に横浜各地で共創、協働を生み出す中間支援活動を行っています。

専門人材や地域住民とのネットワークを築き、横浜の環境・歴史・文化を読み解き、芸術やデザインを市民の身近にすることで、人を惹きつける新たな価値を創造しています。また、人材発掘や情報集積を進め、活発化させることで、地域経済の循環をはかっています。

## ARTIST FELLOWSHIP

### アーティストのキャリア形成を 資金・人的・広報で支援するプログラム

ACYアーティスト・フェローシップ助成は、アーティストを育成し、そのキャリアアップを支援するための助成制度です。

日々新しい表現を追求し、構想を磨き、創作活動にはげむアーティストを対象とし、必要な資金やネットワーク、新しい表現や活動の場所の獲得など、アーツコミッション・ヨコハマが伴走的支援を行います。

また、アーティストの活動場所として横浜の各地域の可能性を探る試みとして、助成に採択されたアーティストが横浜市内で滞在を行いました。

## 2023年度概要

本プログラム最大の特徴は、特定の展覧会や公演等に対する資金援助ではなく、アーティストのキャリアアップのための支援であるという点にあります。ACYの伴走型支援を通じ、自身のキャリアアップを目指すためのプログラムです。

2016年度に「創造都市横浜における若手芸術家育成助成クリエイティブ・チルドレン・フェロースhip」としてはじまり、制度名称・内容を変更しながら8回目の実施となりますが、今年度から大きく2点を変更しました。「年齢制限の撤廃」、および「横浜市内の拠点での滞在および活動の実施」です。

年齢制限を撤廃したことで、幅広い年齢層からの申請がありました。アーティストにとって、支援を受ける必要があると考えるタイミングが、年齢だけで区別できるわけではないということ認識の結果となり、支援のタイミングについては、助成審査会においても議論の的となりました。

また、「横浜に活動拠点があること」という条件を撤廃し、横浜市内の拠点での滞在および活動をすることを活動計画に含んだ申請をいただきました。アーティストの活動場所として、横浜各地の可能性を探る試みとしての変更でしたが、日本各地からの申請があり、影響を強く感じる事となりました。その結果、地域に開いたユニークな活動をするコミュニティ拠点に表現を追求するアーティストが入り込み、「(内容が)身近なアート」ではなく、「(関わり方が)身近なアート」が展開されました。

136件の申請が寄せられ、審査員による一次選考(書類選考)と二次選考(面談選考)を経て5名を採択しましたが、ごく限られた人数にしか助成できない、狭き門となったことは今後の課題です。

助成審査会は、5名の専門家による審査員で構成され、選考にあたっては、下記の審査基準(3つの評価項目)にて、書類・面談を通じた採点を基準に選出しました。

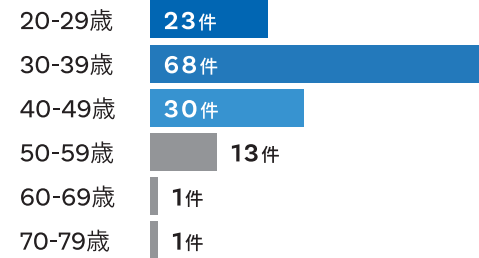
### 審査基準(3つの評価項目)

趣旨理解	助成趣旨を理解した提案になっているか。
独自性	芸術としての手法や形態、また思想や題材等、優れた発想や独自性を有しているか。
実現性	計画および資金使途が明確であり、活動規模やスケジュールが適切か。

## 申請内訳

総数:136件

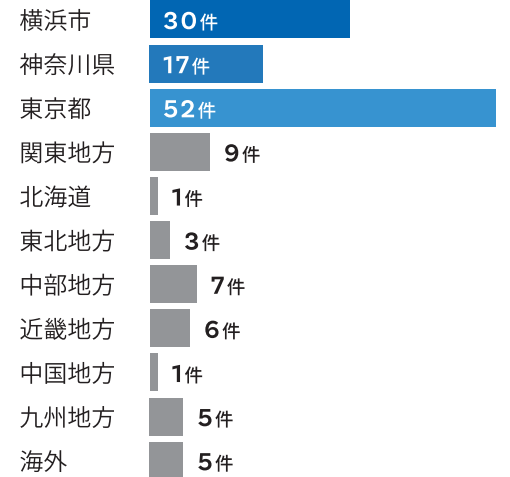
### 年齢



### 分野



### 所在地



## 審査員からのコメント

敬称略/五十音順

### 天野 太郎

東京オペラシティ アートギャラリー チーフ・キュレーター

ACYアーティスト・フェロースhip助成の審査に今回初めて参加した審査講評を記します。これまでもこういったアーティスト支援助成の審査に携わったことがありますが、他に例がないわけではありませんが、市内の幾つかの地点をレジデンスの対象としている点は特徴的なプログラム内容だと思われます。実際の申請書類にも、そうしたレジデンスにおける作品制作に加え、近隣地域の人々の連携を想定した提案が様々見受けられ、その内容の如何が大きく判定に影響しました。こういった活動拠点と地域の連携については、大きく2つの傾向があると思います。一つは、地域の人々を作品に取り込もうとする提案、今一つは、地域の人々を主として美術を感受してもらおうとする提案です。いずれにしても、いかに効果的な活動が期待できるかも判定の基準になりました。

また、応募者のアーティストの幅広いステータス(当事者性や幅広い年齢層なども含め)を昨今のLGBTQなどに見られる様々な価値観の社会的容認への動きにも鑑みながら、どうこのプログラムが受け入れるかは大きな課題となったのは意義深いと思います。受け入れる地域の人々からの理解や協力、支援などは、主催者側の大きなミッションでもあり同時に、そうした理解形成そのものが、アーティストの表現活動の核になるからです。

いずれにしても、アーティストの制作過程やその結果を自己完結的な行為として捉えるのではなく、あくまでもアーティストと各レジデンスの地域社会との有機的な関係構築として今後のこのプログラムを展開させていく事に大きな意味があると感じました。

## COMMENT

## 藤原 徹平

フジワラテッペイアーキテクツラボ代表、横浜国立大学大学院Y-GSA准教授

ACYのフェローシップは、美術分野と舞台芸術分野の2領域にまたがる点がユニークである。今年からフェローシップの対象の年齢制限がなくなり、以前に増して多様なキャリアと方法論を持ったアーティストから申請があった。

すでにある程度キャリアがあるアーティストに対しては、このフェローシップでどのような変化を得ようとしているのか、という視点で審査した。できることならば、横浜でしかつけないような作品をみてみたい。ACYのフェローシップが作家にとってよき上昇転換点となることへの期待がある。

逆に、若手のアーティストには、ぜひこのフェローシップでそれぞれ自分の軸を固めて欲しいと思った。ジャンルや興味に関係なく、子供にも伝わるような「伝達性のある表現であるか」。それはポップであるということかもしれないし、あるいはきちんとした形式性のあるメソッドを取り入れるのかということでもある。

## 山峰 潤也

キュレーター、株式会社NYAW代表取締役

昨年まで続いた「U39アーティスト・フェローシップ助成」を継承しながら、新たにスタートした「ACYアーティスト・フェローシップ助成」は、これまでの趣旨から大きく異なっていた。

【年齢制限の撤廃／活動地域が横浜であるアーティストを対象としていたが、活動地域を不問に／横浜市内の指定施設での滞在と地域交流を必須とすること】

などが盛り込まれ、地域の若手芸術家のキャリア形成を支援するものから、地域との関わりから市民との文化的交流を生み出し、これからが期待されるアーティストの試金石となることが目的と読み取れる内容となっていた。年齢、活動地域などの制限がなくなったため、申請数が増加し、審査は困難を極めた。しかし、その中であって、おぼろげながら判断基準とすべき視点は以下の点であった。

【アーティストが地域に何らかの影響を及ぼす可能性があるか/この地域での滞在が創作活動に影響を及ぼす可能性があるか/アーティストのキャリアにお

優れた音楽の演奏家、あるいはダンスの踊り手、演劇の役者、からの審査は難しかった。創作者の定義の幅をきちんと決める必要があるだろうと思う。

私としては、このフェローシップは、アーティストを育てるような場であるべきだと考えている。フェローシップに選ばれた人であっても、企画として不満があるものが多かった。できる限り正直に感想や意見を伝えるメンタリングをへて、有意義なフェローシップにしてもらいたい。(面談選考の結果、選ばなかった人に対してメンタリングやアドバイスの場がある方が良いかもしれない。)

今年から横浜での滞在活動を実施する。リサーチなのか制作なのか上演なのか。その成果は今のところ想像ができない。予測不能だからこそ面白い応答的な場となることを期待したい。

いて重要なタイミングとなるか】

これらの点からも、地域性を踏まえた活動設計ができているかどうか、また、より発展的な創作に繋がるか、もしくは、この機会を得ることで活動を維持していくことに繋がるか、といった目線での議論が審査会にてなされることとなった。これまでは年齢の基準が設けられていたため、若さとクオリティのバランスから判断していたが、今回は、活動を途絶えずに、またこの機会に知られていって欲しいと願う申請者を含んでいくこととなった。こういった視点で行われる助成金は非常に稀有であるが、議論のなかでもその重要性が認識されることとなった。

アーティストにはそれぞれの人生のタイミングがある。そのため、早熟する人間もいれば、時代の価値観とすりあってくるのが遅くなることもある。だからこそ、年齢という枠で切っていくことだけではなく、柔軟な視点で新たな可能性を支援する枠組みとして、育ち、その価値が認知されていくことを期待したい。

## 岡本 純子

公益財団法人セゾン文化財団 シニア・プログラム・オフィサー

2023年度ACYアーティスト・フェローシップ助成は、年齢制限と活動拠点の限定をなくした結果、申請件数が前年度から倍増以上となった。これまで対象となっていなかった40代以上、または横浜以外を拠点とするアーティストからの申請も多かったことから、需要の高さを実感した。最終的に採択されたアーティストは40代が3名、拠点は全員横浜以外となり、意義ある変更だったといえよう。

一方で、ジャンル別の申請者の割合は美術が多数を占め、舞台芸術、特に演劇分野からの申請が少なかったのは、申請要件に「ACYが指定する横浜市内の拠点での滞在(最短6泊7日)」が含まれたことで、集団創作を基本とするアーティストが申請しにくくなったためではないかと思われる。地域住民との交流も求められており、これらに関心の高いアーティスト向けになったともいえる。採択されたアーティストたちが要件を満たしつつ、自らの本来の活動の価値をいかに高めるかに注視したい。

一次選考(書類選考)では、創作活動における

課題や問題意識が優れているか、それが質の高い作品として表現されているかに加え、横浜での滞中に積極的な意義を見出した申請内容になっているかにも注目した。二次選考(面談選考)では他の審査員の、自分にはない視点、知見に基づいた面談での質問や、その後の討議での意見が大いに参考になった。最終的に5名を選ぶのは困難であったが、そのアーティストが今回、この助成を受けることの意義も訴えた。

助成申請では自身の作品、活動の言語化能力が必須である。書類から作品、活動のコンセプトや意義が明確に伝わっているかどうか、提出前に誰かに読んでもらうのも有効かもしれない。もちろんポートフォリオの作品で表現されていることも重要である。あまりに倍率が高くなり、二次選考に進むのすら困難になってしまったが、二次選考に至らなかったアーティストの中にも私が応援したい方は複数おられたので、一度であきらめず、申請書の言葉も磨いて、また申請してほしいと思う。

シップなんだと思います。今書いていることは全てそのまま私自身に返ってくる話でもありますので、また私もいちアーティストとして舞台芸術をもっと自由に、その魅力をもっと外に拓いていく言葉を磨かなければと痛感する機会になりました。

二次選考では「税金からなる助成金をどう(誰に)使うか」ということが山場だったように感じます。結果、5名のアーティストの方々が選出されました。面談で構想を聞いていると、「アーティストにとっても、地域の方々にとってもきっと刺激的なチャレンジになるだろう」と感じ、それは私の中でとても納得の行く採択理由となりました。皆さんの助成期間での活動にとっても期待をしています。

また、今回採択に至らなかった方々も、この助成はとにかく内容が「独自」でチャレンジしがいがありそうですし、年齢制限はございません。ぜひまた応募していただければ、と思います。

## 野上 絹代

振付家・演出家、多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科専任講師

今回初めてACYアーティスト・フェローシップ助成の審査に関わらせていただきました。美術・舞台芸術の境なく様々なアーティストの思想や展望に触れることができ大変刺激的な審査期間でした。

一次選考では主に各々の【独自性】と【地域住民との交流で起こる化学反応への期待】、という二点に重きを置いて審査をしました。書類の話だけという、独自性や自由度という観点ではどうしても「美術>舞台芸術」と見えてしまいがちで、私にとって高評価の舞台芸術家は奮わない結果が多く、個人的には少しモヤモヤを抱えた一次選考となりました。それは、助成の規程を変えれば解決なのか、ということなんだか違うように感じています。もしかすると、舞台芸術のアーティストが他ジャンルをもう少し意識した上で自身の強みを自覚し、もっと打ち出すべきなのかもしれません。そう考えると、この助成は自身のフィールドの外に意識を向かせる珍しいフェロー



# ARTIST 2023 FELLOWSHIP

加藤 立

坂本 夏海

私道 かび

山岡 瑞子

ユニ・ホン・シャープ

# 加藤 立

Ryu Kato

滞在① 9/13(水)～9/23(土)

展示① 9/14(木)～9/23(土)9:00～18:00

滞在② 11/16(木)～11/27(月)

展示② 11/18(土)～11/26(日)10:00～18:00

※11/20(月)は休場



「Abstract Face” (on going)」(2023年9月、Co-coya) 会場風景

## 活動概要

加藤立は、築60年の民家を改修したコミュニティスペース Co-coyaに、9月と11月の2回に分けて滞在。人類の顔面に抽象絵画が取り憑いた『Abstract Face』シリーズをオープンな空間で展示し、作品のコンセプトやストーリーを伝えながら、来場者と密な関係性を築きました。9月の滞在時に出会った地元住民をモデルに作品を制作し、11月にその作品を展示することで、「展示→モデル探し→制作→展示」の循環をつくり、自立的な作品生成のシステムを構築するという新たな試みに挑戦しました。



「Abstract Face” (on going)」(2023年11月、Co-coya) 会場風景



「Abstract Face” (on going)」(2023年11月、Co-coya) 会場風景

滞在拠点

# Co-coya

## プロフィール

アーティスト。1979年愛知県生まれ。人間の行為を演劇的に捉え、異化し、パフォーマンスなどで作品化している。広島市現代美術館所蔵の作品『I am a museum』(2019)では、美術館所蔵の絵画を複製し、それを背負って美術館の外に出て、街中で出会った偶然の鑑賞者に絵画を観せるというパフォーマンスを行った。最近の活動に、『絵画の沈黙が聴こえてくる』(ANB TOKYO、2022年)、『鑑賞者』(第24回岡本太郎現代芸術賞、2021年)、『I am a museum』(広島市現代美術館、2019年)など。







「“Abstract Face” (on going)」(2023年9月、Co-coya)  
会場風景

### Q1 創作のテーマを教えてください。

この先50年、100年、300年先の人間の未来は、どんな身体に、どんな社会になっていくのが良いのか。それを僕は人間の外側から考えています。例えば、動物や植物が人間との関わりをどのように変化させていくかなど。

現在創作している『Abstract Face』は、絵画が意識を持っていたら、自分たちの将来をどう考えているんだろう？ということペインティングとCGで表現している作品です。写真の台頭やデジタル化する社会のなかでキャンバスすらなくし、それにどう手を打とうとしているのか。おそらく、人間の身体の中に入れていくことを思いつくんじゃないか。遺伝子のなかに入り込み、顔に絵画が発現すれば生き延びれると考え、進化するんじゃないか。そんなポートレートを描いています。



「“Abstract Face” (on going)」(2023年11月、Co-coya)  
会場風景

### Q2 横浜で創作する理由があれば教えてください。

僕の場合、横浜というのは作品と直接は関係ありませんが、この作品を創作するうえで色々な地域、多様な方々と関わることが重要だと考えています。

事後的ですが、Co-coyaのある中山で発見したことが多々ありました。横浜は都会的なところもありますが、少しはずれると畑もたくさんあり、空間的にも精神的にも多少ゆとりを持てる。そんな場所に、都市から一歩ひいて暮らす方が多くいらっしゃいました。彼らは、結果を急がない、長い時間をかけて成し遂げていくという考え方をっていて、それが素晴らしいと思いました。



「“Abstract Face” (on going)」(2023年11月、Co-coya)  
会場風景

### Q3 横浜での滞在を通じて、なにか得られましたか？

滞在場所のCo-coyaはゆったりとした時間が流れる場所でした。オーナーは、「特定のことをやる場所にはしたくない。なにかやりたい人ができる場所にしたい。」と言っていました。それは時間もかかることで、その長期的な視点を手に入れたことが大きな変化だと思います。

今回は、滞在時に会った方をモデルにした作品を制作・展示するという、初めての試みもしました。そこで感じたのは、生きている人にモデルになってもらうというのは、責任を持つ行為だということ。不細工に描いちゃダメとかではなく、“人の人生に踏み込むような感覚”があり、簡単に描けない感じがありました。

また、Co-coyaでは子どもとの関わりも多かったです。中に入って色々話しながら観る子もいれば、外から横目でちらっと観てる子も。この子どもたちの記憶のなかに、なにか違和感として残ればいいなと思います。



「“Abstract Face” (on going)」(2023年11月、Co-coya)  
会場風景

### Q4 今後の展望を教えてください。

『Abstract Face』は引き続き制作を継続していきます。ACYのアーティスト・フェロシップ助成は、「こういう作品ができました」よりも「作家の成長」を目的に支援していただき、今回の滞在を通して時間をかけていくことの重要性にも改めて気づきました。

その他の作品では、一昨年制作した自分の等身大の彫刻を用いた作品について考えています。一年経って対峙すると、自分は一つ歳をとっているが、向こうは変わらない。そこに面白さを感じたのでこちらも継続していきます。

直近では今年(2024年)の6月に横浜市民ギャラリーで、ここ1~2年の作品を展示する個展を企画しています。内容は今詰めているところですが、未来の人間のポートレートのようなものになると思います。今回制作した『Abstract Face』のペインティングやCGも一緒におみせする予定です。



Photo: 大野隆介

## 拠点からのコメント

### Co-coya

空き家をリノベーションした職住一体型の地域ステーション。土壁や漆喰、草屋根など自然を感じさせる改装手法が活かされ、多種多様な活動が繰り広げられている。

### Q1 今回期待したことを教えてください。

Co-coyaは、さまざまな人が来る場所で、色が決まっていない場所だと思っています。この空間にアーティストが来て、どうなるんだろうという楽しみが大きかったです。

作品が展示された時に、空間の雰囲気がぐっと変わったんですね。普段の「ゆるい」空気感とは対照的に、ぴりっと良い感じの緊張感が漂いました。空間の違う表情がみれたり、普段と違う人の往来があったり、とても豊かになったと感じます。「アート」というもう一つの階層ができたことで、ここでの活動の価値があがったなど。いろんなジャンルの人が来てくれたことがとてもよかったです。

### Q2 活動を通して起こった変化はありましたか？

中山に、新しい風がふいたように感じます。ホストとしてできる限りのことをしたいと思って、「つなぐ」ということを意識して、いろんなキーマンに紹介し、フックが広がるように心がけました。環境の変化に強いのもあると思いますが、加藤さんもこのエリアにマッチしていて、来た時には都会の風をまとっていましたが、帰るときには中山の風をまとって帰っていったのが印象的です。

期間中は、子連れの親子、特にお母さんが喜んでいました。鑑賞しに、どこかにわざわざ行くのではなく、立ち寄れるのがいいと。画廊がやってきたような受け止め方をする人が多く、地域住民にとって新鮮な機会でした。

話し手：関口春江、大谷浩之介  
(753プロジェクトメンバー)



「Abstract Face」(on going.)  
(2023年11月、Co-coya) 会場風景

2023

ACYのサポート

6月 ヒアリング

7月 Co-coya下見

8月

9月 滞在①  
展示①

滞在サポート  
展示作業サポート  
審査員来訪

10月

11月 滞在②  
展示②

滞在サポート  
展示作業サポート  
審査員来訪

12月

2024

1月

2月

広島の実験会の広報協力

## ACY担当者からのコメント

加藤さんは、職住一体型地域ステーション Co-coyaの土間で制作・展示を行いました。オープンな空間での活動だったため、子どもから大人まで多くの方が加藤さんの作品を目にするようになりました。いつもと少し違う雰囲気になった「身近な場所」に対して、「画廊が来てくれたみたい」と喜ぶ人、「作家と直接話ができるなんて!」と質問がとまらない人、「普段は全然美術を観に行かないけれど面白いかも」と興味をもつ人など様々な反応がありました。

新作のモデルになった人は、加藤さんとの交流を通して知的好奇心を刺激されたと語ります。近隣に美術館がないエリアにアートが来たことが嬉しく、展示期間中に仕事の会議をCo-coyaで開催し、自分の顔が描かれた作品をみんなで鑑賞して加藤さんとお話したそうです。

また、Co-coya周辺は建築家、拠点運営者、料理人、農家、作家など多様な作り手が交わるエリアでもあります。加藤さんは自身の制作時間外に、彼らが携わるイベントに参加し、作り手と受け手の関係を行き来して語り合っていました。地産の食材を使った食事会や薪風呂など、滞在という形で拠点に入ったからこそ食・住に関わる体験もしていました。

加藤さんがCo-coyaに滞在したことで、まちのファンとアートのファンが互いに繋がり、広がりが生まれました。そして、まちの人たちがアートを身近に楽しんだこの期間、加藤さん自身も楽しみ、制作や交流から様々な気づきや考えの変化を得ていただけたことを何よりも喜ばしく思います。



# 坂本 夏海

## Natsumi Sakamoto

滞在 10/7(土)~10/13(金)

WS① 10/7(土)、10/8(日)

WS② 1/6(土)、1/7(日)

発表 2/24(土)、2/25(日)

※オープンスタジオ&レクチャーパフォーマンス



『Dismantling Motherhood』  
レクチャーパフォーマンス (2024年2月、MPPT)

### 活動概要

坂本夏海は、パフォーマンスアートとマルチメディアアートの新しい拠点Murasaki Penguin Project Totsuka (MPPT) を活動の中心とし、アートプロジェクト『Dismantling Motherhood』を展開。「母」という言葉を解体し、母親業がもつ「他者をケアする能力」をひらくことを目指したこのプロジェクトでは、公募で集まった6名の横浜在住の母親たちと、ワークショップや座談会など、クリエイティブな複数の実践を行い、映像作品を制作しました。



『Dismantling Motherhood』  
Photo: 大野隆介



母親が活動に参加している間に実施された  
子どもアートワークショップ(講師:山崎奈々)

滞在拠点

# Murasaki Penguin Project Totsuka

プロフィール

アーティスト。Back and Forth Collective メンバー。記憶の継承に埋め込まれたジェンダー役割の政治性を探求する映像インスタレーション作品を展開する。近年はフェミニズムの「周縁」に存在した女性の連帯の歴史調査を軸とした芸術実践を行う。最近の活動に「Song for Solidarity (Waulking Song)」(グラスゴー現代美術センター、2024年)、「When Bodies Whisper」(Timespan、2023年)など。



Photo: Alan Dimmick



ワークショップ (2023年10月、MPPT)  
実施風景

### Q1 創作のテーマを教えてください。

今回は作品のタイトルを『Dismantling Motherhood』としました。「母親業を解体する」という意味です。母がやるイメージの労働、「他者をケアする能力」を、どういう風にひらいていくかというプロジェクトになります。公募で集まった6人の母親、研究者の齋藤さん、拠点を始めとする多数の団体と協働して、複数のクリエイティブな実践に取り組みました。最終的にはMPPTでパフォーマンスを行い、それを映像作品にしました。

私自身も二児の母で、娘から母に変わったときに、様々な衝撃や変化がありました。いかに社会が生産性を基準にしまわっていて、「ケア」を過小評価していて、価値が低いとみなしているか。そんな状況を突き付けられた気がして、その経験をアートで昇華したいと思うようになりました。

今回のテーマは、現代の子育てが孤立していると感じている母親が多いなかで、「それがなぜか」をみんなで考えていくこと。制作過程では、それを共有できるネットワークをつくれるようになってきました。具体的には、コンシャスネス レイジングという手法を用いながらセーフスペースをつくったり、戦後複数の福祉団体によって運営された金沢郷の子育てについてみんなで理解を深めたりしました。



ワークショップ (2023年10月、MPPT)  
実施風景

### Q2 横浜で創作する理由があれば教えてください。

横浜は以前にレジデンスをしたこともあり、馴染みがありました。様々なアートシーンがあることも横浜の魅力だと感じています。近くにいろいろなアーティストがいて、刺激を受けられる場所です。

今回は作品を制作する上で、戦後神奈川の福祉事業の原点ともいわれている「金沢郷」のコミュニティに興味を持ちました。戦後に移り住んだ人たちが福祉をしていて、そこでは子育てが共同で行われていました。母子寮の取り組みや、働くお母さんのために託児所をつくっていたり。また、泉区の「白百合農園」も福祉の原点といわれる場所で、戦後に軍用地を使い、栄養失調による発達が遅れた子どもたちや、貧しい家庭の乳児を助けるために、牛舎をつくってミルクを配達したりしていました。これらの場所について、横浜のお母さんたちとともに学び、地域子育てについて考えていきました。



『Dismantling Motherhood』オープンスタジオ  
(2024年2月、MPPT) 会場風景

### Q3 横浜での滞在を通じて、なにか得られましたか？

スコットランドから帰国して最初の作品制作でした。私にとっては挑戦でしたが、本やSNSで得ていた日本人の声、実際に聞いたことで衝撃を受けました。まちに出て人に会うことの情報の多さというのも感激して。お会いした方々の、個々の才能と経験の多様性にも刺激を受けました。

滞在拠点となったMPPTは美しい非日常の空間で、お母さんたちもそれによって引き出されたなにかがあったと思います。運営をされているダンサーの黒田さんには振り付けもお願いし、黒田さんとお母さんとのコミュニケーションから振り付けが生まれたりしました。

ACYの方は、1回くと10返して下さって、おかげで母親を支援する団体や、美術講師、カメラマンなどつながることができました。今回は参加してくれる6名のお母さんたちが活動しやすい環境をつくることもミッションのひとつで、女性の自立や母親のエンパワメントに理解がある方々にサポートしていただけたのは幸運でした。



『Dismantling Motherhood』  
Photo: 大野隆介

### Q4 今後の展望を教えてください。

まずは今回制作した映像作品を多くの方に見ていただきたいです。できれば展示会のかたちで。今回参加していない方がみることによって、この問いかけがひらかれていくと思っています。本もつくっているんで、その作品展示も。今回はプロジェクトのなかで、布を絵の具で染めてパッチワークにしたり、こども服をリメイクしたものなど、色々な成果物があります。それらをインスタレーションの形で発表したいです。

今まで、インタビューをしにいくことはありましたが、ひとつの空間に多くの人が集まって作品をつくるのは初めての体験でした。多くの団体・組織と関わることも。これはフェローシップ助成がなければ実現出来なかったことだと思いますし、この横浜の人々との交流が創造性を豊かにしてくれました。今後の自分のプロジェクトのなかでも、色々な人に出会えるとよいなと思っています。





Photo: 堀越圭晋 (エスエス)

## 拠点からのコメント

### Murasaki Penguin Project Totsuka

2022年9月にオープンしたパフォーマンスアートとマルチメディアアートの新しい拠点。ダンスや演劇、音楽、映画など、さまざまな形態の作品発表が可能。

#### Q1 今回期待したことを教えてください。

最初は、舞台芸術分野のアーティストが滞在すると思っていて、2か月程ここで作品を創作して上演するのかなと想像していました。舞台芸術をつくるのって時間がかかるのが当たり前なんですよね。私たちも舞台芸術をやっているんで、それに慣れてしまっています。

坂本さんの10月の滞在の際、7日の滞在という短さに驚きました。しかもワークショップは2日間、それも1日2時間!世のお母さん達には本当に時間がないっていうのも結構衝撃で、2時間の自由な時間をつくるっていうハードルの高さを初めて知りました。でも、坂本さんはしっかり計画して、準備して、短い時間でもクオリティの高いものをつくっていて、とても刺激を受けました。

#### Q2 活動を通して起こった変化はありましたか?

普段はアーティスト向けのワークショップや、企業の研修などの利用が多く、地域の方が観客としてではなく、プロジェクトに参加するという取組みは初めてだったため、とても新鮮でした。ステージを染めのワークショップの空間として使われた事も面白く、舞台芸術の場だけでなく、美術の発表の場としての可能性をみせていただきました。

また、「みんなのほいくえん at とつか」や「男女共同参画センター横浜フォーラム」など、坂本さんの活動を通して、地元の多様な人をつないでいただきました。戸塚の方にここまでいろんなお話をきかせていただいたのはとても貴重なことでした。プロジェクトの参加者も、ライングループをつくって、鎌倉に展覧会を観に行ったそうです。様々な連帯ができていますね。

話し手: 黒田杏菜、David Kirkpatrick (Murasaki Penguin)



『Dismantling Motherhood』  
レクチャーパフォーマンス (2024年2月、MPPT)

2023

ACYのサポート

6月	ヒアリング	
7月		こまちぷらすご紹介
8月		横浜市民ギャラリー あざみ野ご紹介
9月	滞在 WS①	滞在サポート ワークショップ運営 サポート
10月		
11月		ビデオグラファー ご紹介
12月		サウンドデザイナー ご紹介
2024		
1月	WS②	運営サポート
2月	発表	運営サポート 審査員来訪

## ACY担当者からのコメント

活動の拠点となったMurasaki Penguin Project Totsukaが位置する戸塚には、子育てを支援する認定特定非営利活動法人こまちぷらすや、男女共同参画センター横浜 フォーラムなどがあり、「母親業がもつ『他者をケアする能力』を『ひらく』ことを目指すアートプロジェクト」を展開する坂本さんにとって、作品制作につながる多様なネットワークを築くことができたまちでした。

本プロジェクトにおいて、6名の参加者と半年間にわたって協働するにあたり、母親が一人で参加できる環境を整えていたことが印象的です。「ワークショップやパフォーマンスの撮影時に、子どもも特別な体験ができる託児を設ける」「ワークショップに参加する際は参加費を徴収するのではなく、謝礼を支払う」など、研究者の齋藤梨津子さんとともに、作品の内容だけでなく、心理的ハードルを下げる運営方法まで緻密に計画を立てていました。自ら、MPPT上階にある保育園や一時保育を行うNPO法人、美術講師と交渉をし、託児を実現するなど、その丁寧な進め方は、アートプロジェクトが行われる場所が安心・安全であることの重要性を気づかせてくれました。

また、本プロジェクトでは、ダンサー・振付家の黒田杏菜さんや映像作家の大野隆介さん、サウンドデザイナーの佐藤公俊さんなど、多数のアーティストとの協働を進めています。英国から拠点を日本に移した坂本さんにとって、横浜市民やアーティストとのネットワークの基盤を築ききかけとなれたことをうれしく思います。

# 私道かぴ

## Kapi Shido

滞在① 11/1(水) ~ 11/16(木)

滞在② 11/21(火) ~ 11/24(金)

展示 1/7(日) ~ 2/4(日)



「団地のこえ」(2024年1月、左近山アトリエ131110) 会場風景



滞在時(2023年11月)の様子



『団地のこえ』展示期間中、店舗のマップに作品の舞台となった場所がマークされた。

### 活動概要

私道かぴは、左近山団地内ショッピングセンターの店舗を活用したアート拠点、左近山アトリエ131110に滞在中、約100名の住民から聞き取りをし、その土地に住む人々の過去・現在・未来と左近山の歴史を重ね合わせた24編のテキストを執筆。

テキストやコラムを掲載したリーフレットの配布、俳優が朗読した音声の再生、抜粋したテキストを用いた展示と、3通りの方法で体験できる『団地のこえ』を1か月展示し、多くの来場者が思い思いの方法で楽しみました。

### 滞在拠点

# 左近山アトリエ131110



Photo: 山下裕英

### プロフィール

作家、演出家。京都を拠点に活動する団体「安住の地」所属。戯曲の可能性の拡張を目指し「小説を書き、それを基に戯曲を制作する」という手法を用いる。共同脚本・演出での創作も行う。身体感覚をテーマにした戯曲『いきてるみ』で第19回OMS戯曲賞佳作を受賞。脚本・演出作品『アーツ』が第16回せんがわ演劇コンクールにてオーディエンス賞を受賞。国際芸術祭あいちプレイイベント「アーツチャレンジ2022」や「茨城水郡線 奥久慈アートフィールド2022」等、美術の分野でも作品を発表している。





滞在時(2023年11月)の様子

### Q1 創作のテーマを教えてください。

私は『団地のこえ』という作品をつくりました。団地に滞在しながら、約100名から話を聞いて、左近山団地ができた1968年の100年前から100年後までのおよそ200年間の物語です。24編で構成され、人や草木、タヌキなどが語部になっています。

こうした制作をする背景には、コロナ禍でオンライン配信の公演をしたときに、日常的に劇場に来れない方がたくさんいることに気づいた経験があります。劇場に行きたくても行けない人がいるなら、居住空間に近いところで作品を発表したいと考えました。

こちらから出向いていくので、発表形態は事前に決めずに、地域の方と対話をしながら決定しました。同時に、左近山の歴史についても調査し、この地域ならではの歴史と人、自然のストーリーを制作しました。



左近山団地の風景  
Photo: 私道かび

### Q2 横浜で創作する理由があれば教えてください。

今回の募集要項を見て、横浜の「各地域」というところに惹かれ、そのなかでも、祖父母が団地で暮らしていたこともあって、団地に興味を持ちました。いざ左近山団地に行ってみると大規模で、イメージしてた団地像と違うところはありましたが、それもまた良かったと思っています。関わってくれた皆さんが、アーティストだからといって気負いすることなく、ただの人として接してくれたことも嬉しかったです。

これまでも地元の方にリサーチした内容を元にした作品を制作してきましたが、人口が少ない地域での取り組みが多かったんです。横浜のように人口の多い場所では初めてだったので、そこもチャレンジのひとつでしたが、協力的な方が多く、助けられましたね。



滞在時(2023年11月)の様子

### Q3 横浜での滞在を通じて、なにか得られましたか？

これまで滞在したどの地域と比べても、横浜は都会でしたが、いろんな方のお話を聞いていて驚いたのは、ご高齢の方の悩みは、他の過疎地などと一緒だということです。横浜のように文化施設が整っている場所でも、演劇が好きだけど観に行けない、家でテレビをみるしかないといった声を聞き、楽しみ方をいくつか用意したほうが良いなと思って、今回は音声作品、アトリエでのテキスト展示、リーフレット配布という3つの表現方法を試みました。

また、左近山アトリエの広報協力も心強いものでした。作品を発表するうえで、本来届けなければいけない方に届いているかというのはいつも課題になるのですが、今回は届いたのではないかと感じています。やりたいことと届けることのバランスに悩むこともありますが、今回は「うまくやれば両立できる」という自信を持つことができました。



「団地のこえ」リーフレット  
Photo: 私道かび

### Q4 今後の展望を教えてください。

住む人の話を聞いて、作品をつくるというのは継続していきたいです。ここ5年10年で聞けなくなる話がたくさんあるんじゃないかと思うので。左近山に関していうと、演劇が好きだけど観に行けないという話をよく聞いたので、団地に関する戯曲を書いて上演してみたいですね。

今回の滞在制作のなかで新たに関わられた俳優さんもありました。そうした出会いも大事にし、作家、演出家としての今後のキャリアに活かしていきたいと思っています。お世話になった拠点の方々も地域へのチャレンジを続けているので、左近山との関係性は継続していきたいと思っています。



Photo: 菅原康太

## 拠点からのコメント

### 左近山アトリエ131110

大規模団地、左近山団地内ショッピングセンターの店舗を活用したアート拠点。ギャラリー・ワークショップ・カフェなど、屋外の広場とも連携し様々な活動を展開している。

### Q1 今回期待したことを教えてください。

最初はどのような活動をされるのか想像できなかったですけど、最終的にアトリエで作品発表もしていただいて、住民の皆さんにどのような活動をしているのかということを見てもらったのは本当良かったなと思います。滞在中、左近山団地内を色々まわって、お客さんを連れて戻ってきて「営業しにしてくれたんですね」みたいな感じでした。

自分の町にアーティストが来るだけで、もう何かちょっとざわつくというか、子どもたちも「えー！」みたいな感じで、結構覗いていたりとかするし、そういう「まちがわくわくする」感じがあって、左近山アトリエがアトリエとして商店街に店を出した意味が本当あるなっていう体験をさせていただける機会でした。

### Q2 活動を通して起こった変化はありましたか？

かぴさんの作品、住民の方にも評判がすごい良くて、自分たちが住んでる左近山をこんなに書いてくれて、この前も常連さんが心に響くって感想を言っていました。1街区の自治会長さんも、団地に住む年寄り全員に読ませたいってすごい感動していて、物語にして歴史を残して書いてくれて本当に嬉しいです。

制作した冊子がまだ在庫があるので、展示会が終わった後もアトリエに置いているのですが、団地の方々がそれを読んで、「学校に寄付したら」とか「教科書にすべきだよ」みたいな声があがるくらい愛されていますね。

今後、屋外で演劇をやったりとか朗読会しましょうとか、いろんなことの繋がりをこの後も継続していきたいなと思ってこちらも積極的に声掛けるつもりです。

話し手：熊谷恵美子、森智佳子  
(STGK Inc.)



滞在時(2023年11月)の様子

2023

ACYのサポート

6月	ヒアリング	
7月		豊岡演劇祭2023 『かいころく』 広報協力
8月		
9月	左近山下見	
10月		
11月	滞在① 滞在②	滞在サポート
12月		

2024

1月	展示	展示サポート
2月	展示	新開地アートひろば 「ライトシティー」 広報協力

## ACY担当者からのコメント

私道さんは、左近山団地に20日間滞在し、3歳から99歳まで、地元住民から聞き取りを行いました。1968年に誕生した左近山団地の100年前から100年後まで、過去と未来を想像できるストーリーは、異なる時代を過ごした人々の話を聞き取ったことで、多層的な表情を帯びていきました。24編のテキストは、話し手のプライバシーに考慮し、複数人のエピソードを織り交ぜながら構成され、共通の体験として描かれているようです。

滞在の最終日には、左近山アトリエ主催で送別会が行われました。お花を手渡す拠点の方々と私道さんの間には信頼感のある柔らかい空気が流れていました。

1月から2月にかけて作品を展示した際には、「作品の感想を伝えたい」「話をしたいのだけど、今日はアトリエにいるの?」と、地元住民から左近山アトリエに連絡がくる様子は何度も見受けられました。団地のなかで暮らしながら、そこで営まれている生活を実際に感じ、住民との交流を通じて聞き取りを行う私道さんの手法は、住民の視点により近づくことができると同時に、信頼関係を築くのに非常に効果的だったように感じます。

作品を通じて、新たな発見や気づきを得られた住民の方々が、知人友人に作品を薦め、その方も鑑賞する。住民たちが自分事として作品を捉えているのが印象的でした。日常の、身近な場所にアーティストがいて、作品があるということが、地域のコミュニティを有機的につなげられるということ認識させてくれた活動となりました。



# 山岡 瑞子

## Mizuko Yamaoka

滞在 9/11(月)～9/14(木)、9/18(月)～9/21(木)

展示① 9/11(月)～9/21(木)@ARUNŌ

上映 12/2(土)～12/8(金)@横浜シネマリン

展示② 12/2(土)～12/10(日)@黄金町Site-A



「MAELSTROM Photo in NY from 1998-2002」  
(2023年9月、ARUNŌ) 会場風景



『MAELSTROM マエルストロム』(2023年12月、横浜シネマリン)  
Photo: 中川達彦



「MAELSTROM Photo in NY from 1998-2002」  
(2023年9月、ARUNŌ) 会場風景

### 活動概要

山岡瑞子は、9月に旧横浜篠原郵便局を活用した文化複合拠点ARUNŌ -Yokohama Shinohara-にて、ニューヨークを拠点にしていた際に撮影した写真を初めて展示しました。

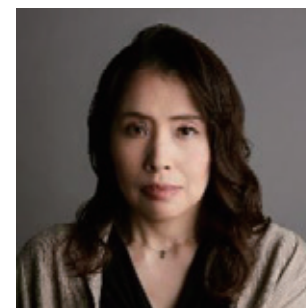
12月には『Maelstrom マエルストロム』の劇場公開にあわせて、黄金町高架下スタジオSite-Aギャラリーにて個展を開催。映画にも登場する、現在までに制作した作品群を俯瞰できる展示となり、アーティストとしてのキャリアを提示することができました。

### 滞在拠点

# ARUNŌ -Yokohama Shinohara-

### プロフィール

映画作家／アーティスト。1998年渡米。2002年Pratt Institute(NY)卒業直後、事故に遭い帰国。中途障害者・帰国者の立場からの制作方法を模索する。2016年、バルセロナで初短編ドキュメンタリー制作。BankART AIR 2021への参加を経て、22年初長編ドキュメンタリー映画『Maelstrom マエルストロム』完成。ピッツバーグ大学 Japan Documentary Film Award 2022受賞。第23回ニッポン・コネクション他、国内外の映画祭で上映され、23年12月に横浜で先行上映。第97回キネマ旬報文化映画ベスト・テン第5位選出。24年5月10日よりアップリンク吉祥寺にて上映予定。





「MAELSTROM Photo in NY from 1998-2002」  
(2023年9月、ARUNŌ) 会場風景

## Q1 創作のテーマを教えてください。

私はアーティストを志し、ニューヨークの美術大学に通っていました。しかし、卒業後のアシスタント先も決まっていた矢先に交通事故に遭い、予想していた未来が変わってしまったんです。その時は、アートの世界に行きたかったのに、医療の世界のなかに閉じ込められたような感じがしました。車椅子生活で社会参加したときにも、つらい経験がありました。これは自分だけのものではない、感情ではなく、社会の事実として伝えることが私のアート表現だと考え、『Maelstrom マエルストロム』というドキュメンタリー映画を制作しました。今回のフェロシップの期間では、私が「本来なりたかった自分」にもチャレンジしています。



「Artworks from the Documentary film “Maelstrom”」  
(2023年12月、高架下スタジオSite-Aギャラリー) 会場風景  
Photo: 中川達彦

## Q2 横浜で創作する理由があれば教えてください。

多感な学生の時期にニューヨークにいた私は、帰国後に誰とつながれば良いか全くわからない状況でした。ご縁があってBankART Studio NYKと、その運営メンバーの方々と出会い、私の創作活動は横浜で広がりました。スタジオアーティストとしていままで3回ほど参加し、初期は『Maelstrom マエルストロム』の編集もしていました。港町としての発展の仕方や、BankARTの広いスペースのつくり方に、私が活動したかったニューヨークの良き面と似ている部分を感じています。

横浜の地の人たちと話すことはいままでなかったもので、ARUNŌに滞在した際は、地域ならではのお話も聞けて、視野が広がった機会となりました。



「Artworks from the Documentary film “Maelstrom”」  
(2023年12月、高架下スタジオSite-Aギャラリー) 会場風景  
Photo: 中川達彦

## Q3 横浜での滞在を通じて、なにか得られましたか？

今回、横浜シネマリンで『Maelstrom マエルストロム』を上映していただけることが決まっていたので、併せて初めての個展をしたいと考えていました。これは今まで実現出来ていなかったことです。黄金町エリアマネジメントセンターの方々や、施工のプロの方ともつながり、キャリアアップにもつながりました。これもACYにサポートいただいたおかげです。卒業時に制作した作品の展示も叶い、私のアーティスト活動が再びスタートしたと感じました。



『Girls (2002)』(2023年12月、高架下スタジオSite-Aギャラリー)  
Photo: 中川達彦

## Q4 今後の展望を教えてください。

私は、自分の経験を通じて疑問に思ったことや、問いかけ、そういうものを作品にしてみましたし、これからもそうしたいと思っています。「個人的なことは政治的なこと (The personal is political)」という言葉が友人が教えてくれました。

いま興味があるのは日本社会の女性に対する扱いについてです。親世代から自分に近い世代の人達に話を聞いていき、どういう経緯を辿り、今に至るのかをクリアにしていきたいです。

今後も、映画に限らず制作を続けたいと思いますし、今回の助成プログラムで実現できたギャラリーなどでの展示もしていきたいと思っています。





Photo: 大野隆介

## 拠点からのコメント

### ARUNO -Yokohama Shinohara-

新横浜駅近くの旧横浜篠原郵便局を活用した文化複合拠点。「未知への窓口」をコンセプトにしたシェアスペースやカフェ、ポップアップテナント等からなる施設。

#### Q1 今回期待したことを教えてください。

アーティストと出会い、新たな関係性を築きたいという期待がありました。実際に受け入れてみて、貴重な機会になったと感じます。自分と違う視点で物事を言語化している山岡さんとの対話はおもしろく、アーティストが近くにいて、話ができるのは有意義なことだと思いました。

場所の提供だけでなく、今後は建築家として、滞在アーティストとインタラクティブな活動ができるといいなと感じています。この土地を知るためのワークショップなど、私自身が企画するのも良いかもしれません。

新横浜で、新横浜食料品センターや集合住宅の設計も行っており、近いうちに竣工予定です。ARUNOだけでなく、新横浜というエリアを活用してもらえると嬉しいです。

#### Q2 活動を通して起こった変化はありましたか？

助成制度の目標の一つとして、「日常の中にアートを」ということを挙げていらっしやると思います。ARUNOが、地元の人たちにアートを届ける場になったことで、この目標を達成できたのではないかと感じます。

山岡さんのお知り合いが来場されたことで、ARUNOの人の流れに変化が起きたことも印象的です。今回のプログラムを通じて、各拠点の方々やクリエイターなど、横のつながりもできました。横浜でどのような人が担い手として動いているか、肌で感じられたこともまたとない経験となりました。

話し手: 若林拓哉  
(株式会社ウミネコアーキ)



「MAELSTROM Photo in NY from 1998-2002」  
(2023年9月、ARUNO) 会場風景

2023

ACYのサポート

6月

ヒアリング

12月展示会場相談

7月

8月

ARUNO下見  
滞在  
展示①

滞在サポート  
展示作業サポート  
審査員来訪

12月展示施工職人  
ご紹介

10月

11月

12月

上映  
展示②

審査員来訪

2024

1月

2月

キネマ旬報 ベスト・テン  
広報協力

## ACY担当者からのコメント

新横浜滞在中に開催した写真展では、約20年前ニューヨーク滞在中に撮影した写真を再プリントし、展示されました。2002年の事故直前の写真をあらためて展示することは、アーティストとしてのキャリアを再びスタートする強い決意のようなものを感じました。

米国での事故後、長らくアーティスト活動ができていなかった山岡さんは、BankART AIR 2021への参加を契機にして、初長編ドキュメンタリー映画『Maelstrom マエルストロム』を完成させました。BankARTをはじめとし、文化施設やアーティストが集積していた横浜の創造環境の充実さを感じていた山岡さんは、横浜を「なくてはならない場所」と表現します。今回のプログラムを通じて、初めて横浜に滞在し、いままでとは異なる横浜の新たな風景を再確認し、新作へのインスピレーションを得たといいます。

12月にはミニシアター・横浜シネマリンで初の劇場公開を迎えました。公開期間中には、著名な映画監督をはじめとした映画関係者とのトークイベントが連日開催されるなど、映画業界でのキャリアを築いていき、キネマ旬報ベスト・テン 文化映画部門で5位に選ばれるなど、快挙を成し遂げました。

劇場公開と同時期、映画館からほど近い黄金町のギャラリーにて開催した個展では、ニューヨーク時代に制作し、自宅に眠っていたインスタレーションを含む作品群を展示し、それまでの活動を俯瞰して鑑賞できる個展となり、多くの来場者が訪れました。今後アーティストとしてのキャリアを形成していくための、ターニングポイントとなっているとうれしいです。



# ユニ・ホン・シャープ

## Yuni Hong Charpe

- 滞在 11/22(水)～12/22(金)
- 拠点利用 12/4(月)～12/18(月)
- グラ会① 11/28(火)
- グラ会② 12/10(日)
- 発表 12/12(火) ※YPAM Exchange
- グラ会③ 12/15(金)



第三回「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)～地震・暴力・回復～」  
(2023年12月) 実施風景 Photo: 渡辺 篤

### 活動概要

ユニ・ホン・シャープは、アートスタジオ アイムヒアを拠点に、パフォーマンス作品『ENCORE II - Violet』へ新しい視点を得るためのリサーチを中心に活動を展開。多様なコラボレーターをむかえたオープンリサーチ「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)」では、リサーチから得た情報をもとに横浜のまちなかを歩いて巡りました。また、歴史と現代を交差させながら植民地主義的暴力とそのトラウマからの回復について再考する『ENCORE II - Violet』について、YPAM Exchange内にて紹介を行いました。



第三回「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)～地震・暴力・回復～」  
(2023年12月) 実施風景 Photo: 渡辺 篤



第一回「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)～地震・暴力・回復～」  
(2023年11月) 実施風景

滞在拠点

## アートスタジオ アイムヒア

### プロフィール

アーティスト。東京都生まれ。現在はフランスと日本を拠点に活動。アーカイブや個人的な記憶から出発し、構築されたアイデンティティの不安定さと多重性、記憶の持続をめぐる、新しい語り方を探りながら、身体／言語／声／振付を通じてその具現化を試みる。最近の作品に、パフォーマンス『ENCORE』、映像インスタレーション『RÉPÈTE』など。2023年度アジア・カルチュラル・カウンシル(ACC)フェロー。







第一回「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)～地震・暴力・回復～」(2023年11月) 実施風景

### Q1 創作のテーマを教えてください。

滞在中は、次回作『ENCORE II - Violet』制作へ向けて、リサーチを進めていました。「ENCORE」、これはフランス語で「もう一度」という意味があります。「ENCORE」プロジェクトとして三部作のパフォーマンス作品になる予定で、第一部は2021年に完成し、日本とフランスで上演しました。今回は第二部のリサーチになります。韓国、城崎、そして横浜と、約4ヶ月間のリサーチをすることができ、こういう作品をつくりたいというビジョンが見えた、実りある滞在になりました。

このプロジェクトのテーマは、「現代社会に生きる個人における、暴力と回復」。20世紀初頭の日本による朝鮮の植民地化を背景にした、在日コリアンコミュニティについて考えています。植民地主義的な暴力やそこからの回復・ケアという問題意識は世界各国にあり、今回横浜で考えたことを、グローバルな議論にもつなげていければと思っています。



第二回「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)～地震・暴力・回復～」(2023年12月) 実施風景

### Q2 横浜で創作する理由があれば教えてください。

私はいまフランスを拠点にしているんですけど、次の作品を関東で制作したいという思いがあって、今回のプログラムに申請しました。年齢や活動場所の制限がないことに加え、過去に参加したアーティストからも良い評判を聞いていたのがきっかけとなりました。

「土地と体」ということに興味があって、横浜を歩いてみたいという気持ちもありました。「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)」を開催し、ちょうど100年前に起こった関東大震災に関連して、実際の地形から当時の状況を想像し、みんなで話し合ったり、当時横浜でもあったとされる朝鮮人虐殺に関するフィールドワークに出かけるなどの、オープンリサーチを行いました。



第三回「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)～地震・暴力・回復～」(2023年12月) 実施風景 Photo: 渡辺 篤

### Q3 横浜での滞在を通じて、なにか得られましたか？

滞在拠点のアートスタジオ アイムヒアを運営するアーティストの渡辺篤さんとは、良い交流ができました。環状島というトラウマ理論について語り合ったり。そういう共通する興味を持ちながらも、つくるものや方法は違うので、渡辺さんの作品へのアプローチの仕方を知ることができて興味深かったし、刺激を受けました。

フィールドワークは山川陸さんと3回開催しました。フィールドワークでは、例えば、地震の時に人が逃げていったと文献に記録がある場所へ実際に行くことで、丘がとても急だとか、風が強いなど身体的なことから知識以上のことを得られました。慰霊碑があって、今もその手入れをしている人がいることを知れたり。

また、多様な専門家のゲストや参加者と一緒に歩くなかで、得たものを誰かと分かち合ったり、交換したりできたことが、回復にもつながりました。ひとりでリサーチする時は、得た知識が自分のなかに溜まり飽和してしまうことがあるのですが、それがほどけていく感覚がありました。



第一回「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)～地震・暴力・回復～」(2023年11月) 実施風景

### Q4 今後の展望を教えてください。

「ENCORE」三部作に関しては、横浜や京都など、日本でリサーチ・発表を継続して行おうと考えています。

また、別の作品ではありますが、4月中旬から東京都現代美術館で開催される「翻訳できないわたしの言葉」という企画展に参加します。この展覧会の担当キュレーターである八巻香澄さんとは、アートスタジオ アイムヒアに滞在しているときに会いました。『RÉPÈTE』という2019年につくった、娘にフランス語のフレーズを教えてもらおう作品と、『Still on our tongues (旧題)』という、フランス・ブルターニュ地方と沖縄でかつて存在した言語政策をテーマにした作品を出品します。

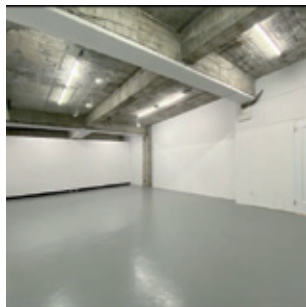


Photo: 渡辺 篤

## 拠点からのコメント

### アートスタジオ アイムヒア

アイムヒア プロジェクトと株式会社泰有社の共同運営によるオルタナティブスペース。さまざまな展覧会／イベント／レジデンスプログラム等を実施している。

### Q1 今回期待したことを教えてください。

アーティスト同士のつながりができることですかね。

今回のプログラムを通じて、ユニさんの才能や魅力に刺激を受けました。ユニさんは、日々の中で触れる歴史とか、地域とか、そういったものを連想ゲームのように、意味を見出していく才能がとても高いんです。例えば、横浜の地形的な構造と「トラウマの環状島モデル」という概念が、思想的に結びつく可能性を見出す。そして、それらを強引にでなく、必然的なつながりを発見していく。さらに、その取組みに伴走し、アドバイスをくれる専門家とも共同するという、素晴らしい取組みをされてました。

### Q2 活動を通して起こった変化はありましたか？

ユニさんのワークショップには、私の以前からの知り合いもいましたが、多くの新たな出会いもありました。

ユニさんは、人と出会ったり、対話することに臆することがあまりない人で、実際にどんどん会いたい人にアポイントを取っていったり、協力を仰いだりしていて、そういう姿勢も、同じ作り手として刺激をもらいました。主体的に動く、反射神経があるアーティストだし、この拠点に滞在してもらってうれしかったです。今回のプログラムを通じて、アーティスト同士の連帯をいただいたように感じます。

話し手: 渡辺 篤 (現代美術家)



滞在時 (2023年11月) の様子

2023

ACYのサポート

6月 ヒアリング

7月 城崎国際アートセンター『ENCORE - Mer』広報協力

8月

9月 『ENCORE - Mer』視察

10月

11月 滞在  
グラ会① 滞在サポート  
WS運営サポート

12月 グラ会②  
発表  
グラ会③ WS運営サポート

2024

1月

2月

## ACY担当者からのコメント

ユニさんは「現代社会に生きる個人に表出した暴力と回復」をテーマに城崎と韓国でリサーチを行った後、横浜での滞在を始めました。約1ヶ月の滞在中、新作にむけて過去／現在の植民地主義的暴力と、そのトラウマからの回復についてのリサーチを行いました。

フィールドワークのグラ会では、関東大震災の被災地や流言のあったエリアなどを、「環状島モデル」\*をもとにトラウマの海と陸地になぞらえて歩きました。横浜の土地を実際に歩くことで、当時の状況を想像する、自身のトラウマ体験と回復の過程が思い起こされるなど、文献調査以上のことを身体で感じたそうです。トラウマの海から陸へあがる(即ち回復へ向かう)ことは、坂道をのぼる時に感じる負荷のかかった足と似ている、どちらも自ら歩みを進めなければいけない、と語っていたのが印象に残っています。

拠点であるアートスタジオ アイムヒアでの渡辺篤さんとの出会いも、ユニさんにとって今回のリサーチを深める大きな要素となりました。活動のテーマや背景に共通点のある二人は、滞在中と拠点運営者としての関係を越えて、アーティスト同士の対話の時間を多くもちました。また、横浜に縁のあるアーティスト、ダンサー、キュレーター、研究者とも交流し、身体や言葉の表現を介して濃密なやりとりを展開しました。

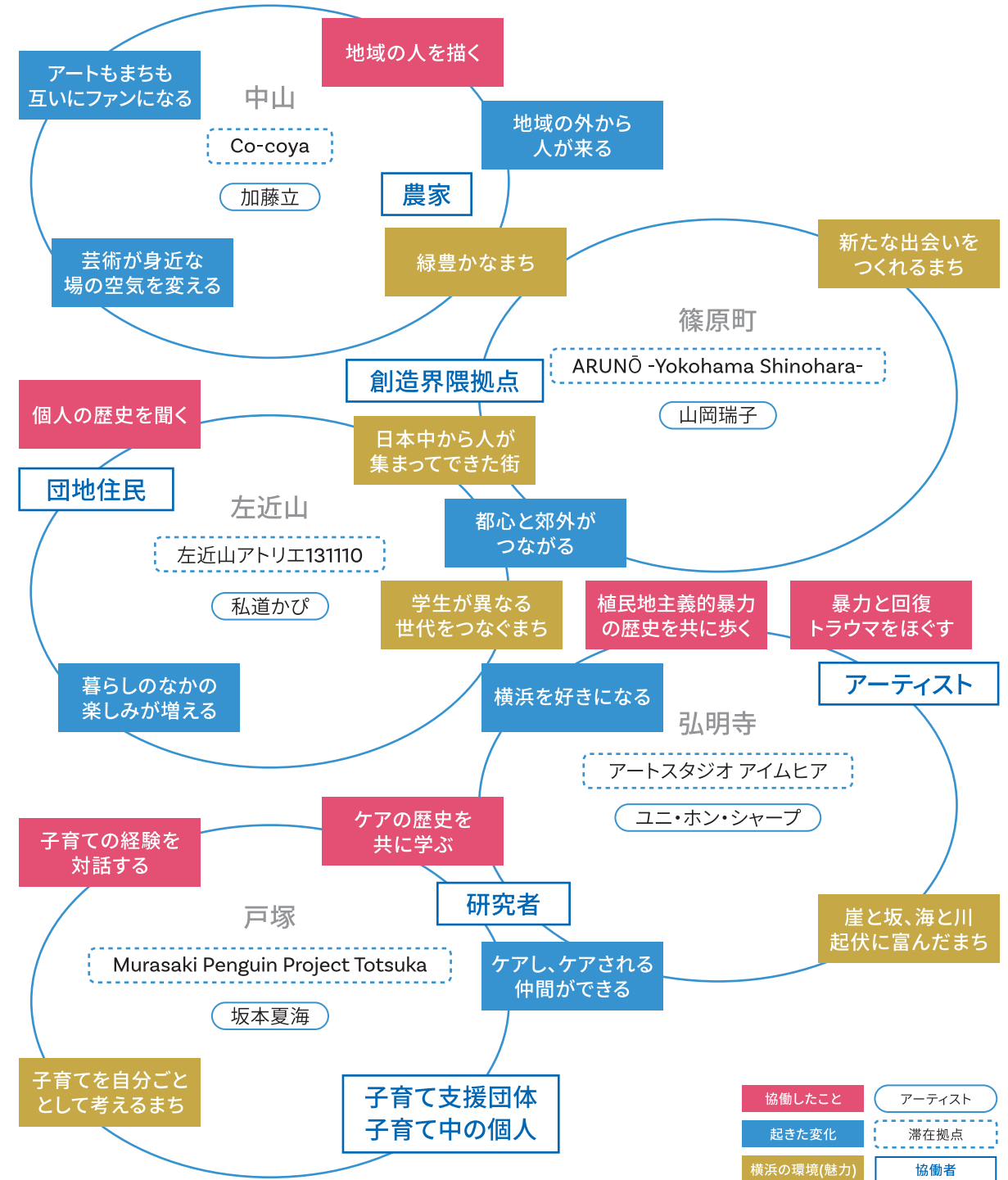
今年度のリサーチをもとに、横浜で発表する計画があるとのこと。今回の滞在中を契機に、横浜がユニさんの活動場所のひとつとして続いていくことを期待しています。

\*宮地尚子『環状島=トラウマの地政学』みすず書房、2007年



## アーティストと市民の協働からみえたこと

アーティストが地域に入り、市民と協働することで見える横浜の歴史、風土、環境、資源と魅力。その視点・視座を取り込むことで、横浜がより多層的、複合的に見えてきます。



## 2023年度総括

ACYは今年度から「人を惹きつける新たな価値創造のため、横浜各地の文化の多層化と複合化に取り組む」ことを新たな目標としています。それを実現するプログラム「ACYアーティスト・フェロシップ助成」は、アーティストのキャリア形成を支援するものです。

2016年度から内容を更新しながら継続していますが、今年度は特に大きく変更し、これまでの「資金」「ネットワーク」「広報」支援に加え、芸術と社会が交わる新たな領域の検討をするために「横浜に滞在すること」を取り入れることとしました。

今回、これまでACYが主なフィールドとしてきた、多くの文化芸術拠点や芸術祭などがある横浜都心臨海部ではない地域に、その可能性を求めました。横浜の各地域には、豊かな自然環境や穏やかな住環境、港町より長い歴史など、都心部とは異なる魅力が詰まっています。また、地域の特性を捉え、まちとの接続をはかる拠点が存在することも魅力の一つです。これらの拠点は、住むこともでき、コミュニティスペースやアトリエ、ギャラリーなど、心地のよい居場所としてそこにあり、まちに新たなコミュニティの層を形成しています。加えて、東京に近く全国各地へのアクセスが良いという利点もあります。

コロナ禍以降の社会の変化と、時代に敏感なアーティストの価値観を考えた場合に、こうした拠点の方が関心を持ってもらえるのではないかと考えました。

アーティストが郊外部に滞在し、地域の魅力を受け取り、協働することで、「地域」と「アート」、双方の魅力を顕在化させることができるのではないかと考えました。アーティストと地域住民が、相互に触発されることで、新たな価値が生み出せるのではと期待しました。

採択されたアーティストは、それぞれの地域の環境を応用しながら、活動を展開しまし

た。まちに溶け込みながら、リサーチを深め、同時代的に横浜を見つめなおしていくような活動は、アーティストのためだけでなく、地域住民のモノの見方を更新し、創造性を刺激するものばかりでした。

また、地域に根差した拠点の持つネットワークを活用し、アーティストが地域に入ること、歴史や風土、環境、資源など、横浜の魅力が、より鮮明にみえてきました。アーティストの視点、視座を取り込むことで、横浜をいままでよりも多層的、複合的にとらえることができるようになったのです。

本助成プログラムは、展覧会や公演などの事業に対してではなく、アーティストに対して支援を行う事業です。活動期間を通じて、多様な魅力を持つ横浜のファンになってくれたアーティスト・フェロの皆さんが、今後も横浜で作品の制作や発表など、活動を続けたいと口にしてくれることを喜ばしく思います。また、地域の方が、アーティストとの対話を通して、アートのファンとなり、生活や考えが豊かになったと感想を伝えてくれたことは、地域を舞台にすることの可能性を示してくれました。

今回の実施を通じ、アーティストが地域に滞在することは、「都市文化の保存、再生」と「文化多様性の保護、促進」に寄与することがわかりました。アーティストの横浜での活動を支援することで、地域の協働や共創が活発化することもみえ、それがアーティストと地域、双方にとって、価値創造につながることを示されました。このプログラムを通じて、横浜とアートの魅力がより広く認識され、都市全体の文化的な豊かさが深まっていくことを期待しています。

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団  
経営企画・ACYグループ

## 公募概要

**助成趣旨** 本プログラムは、アーティストの活動場所として横浜の各地域の可能性を探る試みです。アーティストは、必要な資金やネットワーク、新しい表現や活動の場所の獲得を通して自身のキャリアアップを目指します。また、ACYは人を惹きつける新たな価値創造を目指して、横浜各地の文化の多層化と複合化に取り組みます。日々新しい表現を追求し、構想を磨き、創作活動にはげむアーティストを対象とします。地域に開いたユニークな活動をするコミュニティ拠点に、自らの表現を追求するアーティストが入りこむことで起きる予測不可能な化学反応を期待します。

**対象** 趣旨にある活動を行い、かつ、以下の条件をすべて満たすアーティスト個人

- ・美術、舞台芸術の分野において活動するアーティスト
- ・過去のACYによる助成プログラムにおいて、申請者として採択されたことがないこと

**提案内容** 下記を含むキャリアアップにつながるリサーチや滞在制作、作品発表等、対象期間における創作活動

- ① 年間を通じた創作活動
- ② ACYが指定する横浜市内の拠点での滞在(最短6泊7日)
- ③ 地域住民と交流する活動(公演、展覧会、ワークショップ、トークイベントなど)

**対象となる期間** 2023年6月1日(木)から2024年2月末日まで

**助成額** 1,000,000円(定額)

**滞在拠点**

- ・ アートスタジオ アイムヒア(横浜市南区弘明寺町259 GM2ビル2階)
- ・ ARUNŌ -Yokohama Shinohara-(横浜市港北区篠原町1410)
- ・ Co-coya(横浜市緑区中山5-9-1)
- ・ 左近山アトリエ131110(横浜市旭区左近山16-1 左近山団地1-31-110)
- ・ Murasaki Penguin Project Totsuka(横浜市戸塚区戸塚町4247-21 地下1階)

**サポート内容**

- ・ 相談・情報提供や人材の紹介
- ・ 滞在拠点における活動の支援
- ・ ACY HP等、財団が持つ広報ツールを活用した広報協力
- ・ 滞在の様子や展示・公演風景、レビュー等を掲載した記録冊子の作成・謹呈

**スケジュール**

2023年	2024年
3月23日 募集開始	3月20日 活動報告会(ACY感謝祭内)
4月6日 オンライン説明会開催	
4月13日 オンライン説明会開催	
4月26日 募集締切	
5月27日 助成審査会開催	
6月5日 審査結果通知	

発行 公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 経営企画・ACYグループ

企画・編集・執筆 同 アーツコミッション・ヨコハマ担当

小原光洋、加納向日葵

図案作成 同 杉崎栄介

編集・執筆・デザイン 有限会社スタジオニブロール

協力 加藤立、坂本夏海、私道かび、山岡瑞子、ユニ・ホン・シャープ

関口春江、大谷浩之介(Co-coya)

黒田杏菜、David Kirkpatrick(Murasaki Penguin Project Totsuka)

熊谷恵美子、森智佳子(左近山アトリエ131110)

若林拓哉(ARUNŌ -Yokohama Shinohara-)

渡辺篤(アートスタジオ アイムヒア)

acy@yaf.or.jp  
https://acyyaf.jp.org/  
Email  
URL

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団  
〒231-0023 横浜市中区山下町2  
産業貿易センタービル1階

発行：2024年3月20日



私道かび  
「団地のこえ」(2024年1月、左近山アトリエ131110)  
会場風景



山岡瑞子  
「MAELSTROM Photo in NY from 1998-2002」(2023年9月、ARUNŌ)  
会場風景



ユニ・ホン・シャープ  
第三回「横浜をグラグラ歩く会(グラ会)～地震・暴力・回復～」(2023年12月)  
実施風景 Photo: 渡辺 篤